

同種の調査・研究には必ず参照されるべきものとなろう。屋瓦については、高槻城出土のもの分類と編年だけでなく、畿内における近世瓦の成立についても教員を費しており、貴重な研究と言えよう。章末には調査の主要成果である沖積地での石垣基底部の作成技法を復元的に図示してまとめられている。

付論「近世高槻城の修築とその背景」では、文献と石垣の刻印・墨書印から藤堂高虎の関与を推測し、それを大坂城の普請と関係づけているが、概ね妥当な見解であろう。こうした点も石垣の技術など考古学的な資料から裏づけられれば更に面白い。

以上、筆者は所謂「文献」畑の人間であるため、十分な紹介と評価ができていないと思われぬが、よくまとまった高水準の報告書であることは間違いない、詳しくは現物を御覧になっていただきたいと思う。ただ少し欲を言うと、これはひとえにこの種の調査・研究の立ち遅れによるものであろうが、折角のデータが孤立気味で、高槻城の歴史を離れた城郭史、或いは更には近世史への広がりや乏しく、それら全体の中での位置づけが今一つはつきりしない。

成果の中心である石垣についてももう少し他との比較が欲しいし、また筆者の関心で言えば、第一章で高山右近の総郭型城下町が原型であることを言うなら、それと同時に代と同じ総郭型の城下町、例えば荒木村重の伊丹城や、或いは最近大規模な総郭の存在が明らかにされた勝竜寺城などとの比較があれば、高槻城の持つ価値が更に明らかになったと思うのである。そうした並行する遺構のデータが揃い、総合的な考察が可能になる日を待ちたい。

ともあれ、考古学の成果が他の分野に裨益するところ大であることは言うまでもなく、今後は「文献」史学者なども、近世史に至るまでこうした成果を活用していくべきであろう。それによって更にこうした遺跡に目が向けられ、保存と調査が盛んになることを期待したい。

(A4版 一五五頁 図版一一〇頁
別図二枚 一九八四年三月 高槻市
教育委員会 四五〇〇円)
(小島道裕 京都大学大学院生)

Noboru Karashima

South Indian History
and Society, Studies
from Inscriptions A.
D. 850—1800

本書は著者辛島昇氏が過去一五年間に発表された九世紀から一八世紀にわたる南インド史、主要にはチャョーラ朝時代のタミルナードゥに関する一三の研究論文を編んで一書としたものである。これらの論文は、もと和文で発表され今回英訳して収録された一編を除き、すべて国際会議や海外の雑誌、国内の紀要、海外学術調査報告書等さまざまな場において英文で発表されたものであり、うち四編はインド人学者と共同して発表されたものである。今回の採録に際して重複箇所を削除や最新の研究成果の吸収など全体の調整と若干の補訂がなされたほか、新しく長文の解説を草し、本書の対象とするところや課題、各論文の位置づけなどを明かにしている。

一三編の論文は、それぞれの内容をよく

示すと思われる初出時の題目名で掲げると、次の如くである。(1)アッルールとイーシャーンマンガラムーチャョーラ時代の南インド二村落(一九六六年初出、以下同様)、(2)チャョーラ支配末期のカヴェリー川下流域にみられる新しい農村秩序(一九八一)、(3)後期チャョーラ期カヴェリー川下流域における私的土地所有の普及とその史的検討(一九八〇)、(4)ヴェドラニヤムの後期チャョーラ期刻文にみられる土地譲渡(一九七六)、(5)チャョーラ支配の権力構造(一九六八)、(6)村落共同体に関するチャョーラ朝刻文(一九七二)、(7)タミル語刻文にみられる人名の統計学的研究(一九七六)、(8)チャョーラ期刻文にみられる地租用語(一九七二)、(9)タンジャールとガンガイコンダチャョーラプラムの寺院刻文にみられるチャョーラ時代の地租査定(一九八〇)、(10)ティルチラパッリ県および旧ブドゥッコッタイ州の刻文にみられるパインディア時代の地租用語(一九八〇)、(11)タンジャール県の刻文にみられる社会経済上および農業経済上の用語(一九七七)、(12)ヴィジャヤナガルの刻文に見る寺院領の貸与について(一九七二)、(13)一七・一八世紀マドラス近郊

地区のミーラスダール(一九七五)。これらが土地制度、社会関係、地租制度、後続時代の四篇に分けて本書に収められているのである。

著者の主要な関心は南インド社会の歴史的發展ないし変化におかれている。いいかえればそれは一九世紀ヨーロッパの学者たちが主張した停滞的社会論を再検討することであって、そのために土地所有の問題と権力構造ないし支配装置の問題という二つの大きな問題が基調にすえられている。豊富な刻文史料を援用、分析した著者は、チャョーラ朝時代が集権的古代国家の頂点に達した時代であり、南インドの封建制は一三世紀におけるこの王朝の崩壊後に成立するとの見解を明かにし、併せてバートン・スタインやキャスリー・リッガウ等の所説を批判した。

本書には古代インド史家ロミラ・ターパールの序文が寄せられており、また南インドの関連地図四葉のほか、基礎的専門用語を簡潔に説明した用語一覧、チャョーラ支配期の時期区分表、略語一覧、文献目録、それに索引も付されて利用の便に供されている。すでに著者には英文による大冊三分冊の共

著 *A Concordance of the Names in the Coia Inscriptions*, 3 vols., Madurai, 1978
 があるが、このたび同じく英文でその主要論文集が刊行された意義は大きい。南インド史研究に日本人としてはじめて本格的な畝を入られた著者によるこの論集が、国際的な評価に十分耐えて、研究史に新たな寄与を画すものとなることの疑いなきことを確信する。

(一五三頁、一九八四年、Delhi:
 Oxford University Press)
 (近藤浩 追手門学院大学教授)